修士論文要旨

将門信仰の変容過程

Transformation Process of Belief to Masakado

亀ヶ谷　海（Kai Kamegaya）　　指導：谷川　章雄教授

第１章　御霊信仰の成立と展開

御霊とは個人の人間の霊である。個人の霊がいつ頃成立し、怨霊・御霊はどのようにして現われたのだろうか。個人霊が成立したのは、個人の意識が芽生えた段階であるとされ、それは、律令制度の政治が発展し、貴族が個人の政治活動を行うようになった平安期だとされている。この時代に、当時の政変で敗れ去り死んでいったものが、怨霊としてその政変の競争相手だった者などに祟りをなすという発想が、その当時の天変災害などと結び付けられることで、その祟りを鎮めるためにその個人の霊を祭祀することから御霊信仰は始まった。また一般民衆の間にも御霊信仰は成立していた。一般民衆には直接関係のない人物を信仰していたのだが、民衆は、その当時頻発した大規模な自然災害・疫病などをその人間の祟りと結びつけて信仰していたようだ。

中世になると、この御霊信仰は発展する。中世の怨霊は、政変で敗れ去った者から戦死者が主なものとなるが、死後の人々に供養されることによって逆にプラスの機能を現すという側面を持つようになる。御霊とは元来の祟る性格も有したまま、祟ったり、現世利益をもたらしたりを繰り返す者であると考えることにしたい。

第２章　将門伝説の研究

梶原正昭・矢代和夫らによって将門伝説の発生や伝播には、東国武士団、また宗教者・芸能者による関与、そして文芸活動との関わりなどが相互に影響していることが指摘され、織田完之により、近代において将門の再評価がなされ、史実に沿った将門像の再構築・伝説の集積がなされた。榎美香は、文芸作品における将門伝説の影響を指摘し、文芸活動にみられる将門関係の伝説的なモチーフを抜粋し、整理した。

今までの先行研究は、史実の将門、伝説の将門を分析することに集中されていて、将門伝説と将門信仰がどのように影響しているかについての指摘がなされている研究がないことと、御霊としての将門が成立当時から現在に至るまで、どのように変化してきたかを論じている研究がないことである。これからの将門研究はこのなされていない方面の研究を進める必要がある。

第３章　平将門

平将門が生まれた地は古代においてから歴史的に朝廷から抑圧された地であった。九世紀にはいると、国司が任期後もいすわり土着化する傾向が強くなり、地方は国司による酷政が横行する時代になる。平将門の祖先の高望王も土着化した国司であった。将門記は承平・天慶の乱からそれほど経たない時期に作られたものとされ、将門記が私闘の部分や合戦の状況が事細かに描写されている点や、解文、官符、書状などの記録類が多く含まれること、将門への同情的な書き方などから比較的将門に近しい立場の人物が実録的な作品として書いたものといわれる。将門記の最後の部分は仏教的な説話で結ばれており、あとで付け加えられたとされているが、将門記成立当初から将門伝説の芽生えが確認できるる。

第４章　将門伝説とその展開

将門伝説は宗教者によって生み出されたといえる。将門伝説は宗教者の布教の手段の一つとして発展する。次に将門伝説を担ったものは武士階級であった。鎌倉武士の間では将門は武勇の誉れであり、朝廷に敢然と反旗をひるがえした一種の憧れの存在であった。室町時代に入るとそのような説話が『語り物』と呼ばれる中世文学としてまとめられ、民衆に広がりだすようになる。江戸時代に入ると文芸活動はさらに盛んになり、将門はその中でさらにデフォルメされ超人化していく。また、神田明神への信仰も盛んになり、江戸文芸と相互に影響しあっている痕跡を見ることができる。

第５章　将門信仰の変容と背景

将門信仰は、その当時の時代の人間の欲求に応じてその姿をその度に変えてきたといえるのではないか。末法思想が流布していた将門伝説成立当初においては、宗教者の布教のために回向供養される怨霊であり、武士階級に己の血統の祖として祭られる鎌倉時代においては、神仏の加護を受けた特別な人間、江戸時代においては発展する文芸の中に取り上げられ、デフォルメされることで民衆にはより親しみやすい将門として信仰されることとなる。また近年は、空前の『妖怪ブーム』であり、幽霊や妖怪をモチーフにした小説や映画が数多く製作されている。荒又宏の「帝都物語」がヒットしたのは、そのさきがけといえるだろう。江戸時代の文芸と将門信仰が相互の影響し信仰が変容した構造が、今日においてまた現われ、発展していく可能性があるといえるだろう。